

ジャック・リッパ・ポトローが撮った日本人

フィリップ・グローバー オックスフォード大学 ピット・リヴァース博物館
Philip Grover

往時の勇姿を偲ばせる 初期写真

ピット・リヴァース博物館 (Pitt Rivers Museum) は、一八八四年、考古学と進化人類学の分野の影響力のあるピット・リヴァース将軍が、オックスフォード大学に彼のコレクションを寄贈したことによって設立された、人類学と世界考古学のオックスフォード大学の博物館である。

ピット・リヴァース博物館は、30万点を超える資料を収蔵し、なかでも民俗学資料については世界で最も重要なコレクションを持つ博物館である。発足当初から日本

関係を含む写真資料についても収蔵しており、ピット・リヴァース将軍のコレクションには、博物館設立以前にサウスケンジントン博物館で展示されていた横浜のシュテルフリート&アンデルセンによる日本写真社から販売された写真も含まれていた。以降、博物館の写真資料数は充実し続けており、現在では世界各国から収集した写真発明期の重要な作品をはじめとする興味深い写真が納められている。

このようなコレクションの中に、注目すべき一組の写真群がある。図1を含むこの写真群は、台紙に貼付された鶏卵紙によって構成され、イギリスのオックスフォード点からこの写真群はまとめられている。フランスの代表として訪日したデュシェーヌ・デ・ベルクールによって集められたフェリーチェ・ベアトのプリントをその数年後にパリで複製したものなど、わずかだが複写によって制作された作品も含まれる。

そして、この写真群には文久二年(一八六二)の竹内遣欧使節団(図1、3、8)と元治元年(一八六四)の池田遣欧使節団(図4、7、9、12、13)の肖像写真も含まれている。西欧諸国と結ばれた開港に関する条約の諸条件を再交渉するため、これらの使節団は徳川幕府から派遣された。30名以上に及ぶ使節団は半年から一年をかけて多くのヨーロッパの都市を訪問した。

これは日本の製糸業に対する競争力の不安から日本国内の諸外国の影響範囲を制限する政策を背景にしていた。竹内使節団は安政年間に締結された不平等な条約の内容より長い間、二つの都市と二つの港を開くことを遅らせる任を託されていた。

続く池田使節団も同様の任を負っていたが、条約改定に至らなかったばかりかより短期間での帰国を余儀なくされる。しかし、このような使節であったにもかかわらず、両訪問はヨーロッパにおいて強い関心を引き、当時の出版・新聞で広く報告された。



図1 高松彦三郎



図2 福沢諭吉

に近いニューベリー町の公立博物館(現・ウエスト・バークシャー・ミュージアム)の学芸員であったハーバート・コグランによって一九五一年に移管されたものである。これらがなぜ移管されたのか、その詳細は不明である。しかし、コグラン氏は、この頃ピット・リヴァース博物館の学芸員であったトーマス・ペニーマンと知り合いであった可能性が高く、この写真群が彼の機関よりも民族的なコレクションにふさわしいと考えたことによって、移管されたことは想像に難くない。

この写真群は約500点のプリントで構成されており、含まれる点数と内容がわずかに異なる内容のコレクションが、他の博物館にいくつか確認されている。各々の写真の台紙裏には印刷されたラベルがあり、『Collection anthropologique du Muséum de Paris (パリ人類学博物館蔵)』の記載と共に情報が添えられる。一部には写真師や撮影日も記載されており、制作時期は概ね一八六〇年代である。記載される写真師には、パウル・エミール・ミオ、ピエール・ロシエ、ルイ・ルソーなど初期写真史における重要な人物も含まれている。

ほとんどのプリントが単身の肖像写真で、被写体の人種や国籍などが書かれたラベルが貼られており、科学的資料という視

(P 92~97の写真はすべて Pitt Rivers Museum Collection)



図3 箕作秋坪



図4 堀江六五郎



図5 田辺太一



図6 池田筑後守長発



図7 斎藤次郎太郎



図8 野沢伊久太の部分

遣欧使節団を撮った フィリップ・ポトーとは？

彼らの写真は、パリで働いていたジャック・フィリップ・ポトー (Jacques Philippe-Poteau, 1807-1876) によって撮影された。ポトーは魅力的であると共に、謎めいた人物でもある。国立自然史博物館の職員であったが、高位にあったわけではない。このため、現存する記録から経歴を詳らかにすることは困難を極める。わずかに残る資料から、ポトーが一八三八年つまり31歳にはすでに職員であり、一八五三年には将来有望な助手 (jeune savant) であると言及されており、主に技師としての役割があてられていたことがわかっている。また、会計処理上から辿ることが出来る例として、一八五五年に地質学研究所の鉱石調査のため下準備を行ったことや大理石の研磨と切断を行っていたことがわかる。残念ながらポトーがどのように写真技術の習得したのかはわかっていない。

ただし、レイ・ルソー (Louis Rousseau, 1811-1824) から技術的訓練を受けた可能性は十分に考えられる。

ポトーと同じ機関に雇用されていたルソーは、一八五六年のナポレオン3世によるグリーンランドへの科学研究遠征において、一八六六年には中国の使節団をそれぞれ撮影している。

一八六二年の竹内使節団に対してポトーは、全体の1/3を撮影したものの、高位にある人物のほとんどを撮影していない。これに対して、池田使節団では正使の池田長発 (図6) から理容師の乙骨亘に至るほとんど全員の撮影を敢行している。そして、ポトーによる遣欧使節団の肖像写真群は、彼が到達した成熟期のスタイルだといつてよいだろう。

一八六一年のシヤム使節では、椅子やテーブルなどの小道具を写し込んでおり、この時代の肖像写真撮影の一般的な手法がとられている。これに対して、翌年の竹内使節ではより被写体に肉迫して人物に焦点をあてており、余計なものが排された写真となっている。すべてではないにせよ、正面と横顔をそれぞれ撮影する手法がポトーの典型といえる。一部には立像の全身像もあるが、大部分は着座した状態で撮影されている。全身像よりもクローズアップとなるため、被写体の人相や皮膚の状態、あるいは被服の形状が強調されることとなる。ポトーはコロディオン湿板方式によって

て肖像写真の制作を行うなど、民俗学的記録において著名な人物である。つまり、二人は同時期に同じ機関で働いており、ルソーから写真技術を伝えられるチャンスがあったのである。いずれせよ、ポトーが専念した仕事は、フランスの首都であるパリを訪れた外国人の肖像写真を制作することだった。

撮影は主に自身が持つ職場に近い、パリ植物園付近のスタジオで行われた。自然光によって撮影する当時からしく、悪天候の中で撮影したことがラベルに残る写真も現存している。17世紀に王立薬草園として設立されたパリ植物園は、今日でも外国人の訪れる観光スポットだが、19世紀においてはさらに重要な場所だった。ポトーはここで被写体となる外国人に声をかけたと考えられる。ときには、ひとりで散歩している人を撮り、またあるときは一八六三年にパリに駐屯していたアルジェリアの軽騎兵たちに代表されるような集合写真を撮影した。

ポトーの撮った写真

ポトーの写真で最も歴史的に重要なものは、一八六〇年代にフランスを訪れた諸外国の使節団である。幕府からの二つ

写真を制作しており、その技術は熟達していた。被写界深度が浅いにも関わらず、彼の写真は細部の先鋭度が高く、注目に値する。

一つの写真 (図7) では家紋が袴ときもので異なっていることがわかる。図8は、松平石見守の家来である野沢伊久太の肖像写真に写る刀の束の部分である。ここでは束の絞革だけでなく、目貫の細部に至まで克明に写し込まれている。また、通詞 (通訳) の塩田三郎 (図9) は、当時の日本では少なくなかった天然痘を幼少期に患ったことを示す痘痕まで鮮明に伝えている。

プリントの方法が被写体の地位の高さによって異なっていることも特徴といえる。これは三つに大別することができる。大部分の肖像写真はプリントの四隅が真っ直ぐ切り取られて八角形となっている。少数しか存在しない全身像や立像では、プリントの四隅が丸く切り取られている。そして、使節団の正使をはじめとする最高位に属する人物では、暈かしを使って人物を浮かび上がらせるプリント手法がとられている。つまり、地位が高ければ高いほど、手の込んだプリント技術が用いられているのである。

これらのプリントはすべて個々に台紙



図9 塩田三郎



図10 福沢諭吉(図2)裏面のラベル



図11 斎藤健次郎



図12 西吉十郎



図13 西吉十郎の横顔



図14 すみ

に貼付されており、一八六〇年代の後半にポトー自身によって制作されたと考えられる。それぞれの台紙裏には、ラベルが貼付されており、これは一見手書きのように見えるが、実は銅版による印刷である。一番上に国立自然史博物館蔵であることが明記され、下に被写体の名前、年齢、生地、使節団における役割や業務、最後に撮影日などが適宜記載されている。

ポトーは聞き慣れない日本語を文字に起こす努力を惜しまず、被写体たちの名前を記述したことが「Souka Sawa」と記された福沢諭吉のラベル(図10)から伺える。わずかに本旨からずれるが、この記述から福沢諭吉がこのとき、フルネームではなく名字のみ名乗った可能性を感じさせる。撮影時の息づかいを直接感じられるよう興味深い。

ラベルの記述は、ポトーの被写体への興味の深さを物語っている。
図11の斎藤健次郎は遣欧使節団の一員ではなく、池田使節団がフランスを訪れた際には既にパリに在住していた人物である。彼についてポトーは、一八六二年(文久二)に横浜を訪問したベルギーの起業家シャルル・ド・モンブラン伯爵によって雇われ、フランスに連れて来られたとラベルに記載している。これらのプリントは販売用か、

あるいは他の博物館や蒐集家と交換する目的でまとまって作られた可能性が高い。例を挙げると、チャールズ・ダーウィンがポトーの写真群を所蔵していたことが知られており、彼は一八七一年に上梓した『人の由来と性に関連した選択』でその存在について触れている。ダーウィンはじめとする科学的立証の研究資料として使用されたことから、ポトーの写真は人類学的な目的で制作されたと理解されている。しかし、それはおそらくポトーの意図するところではなかったと思われる。ラベルには、性別の記載もなく、逆に被写体個人の情報が記されている。これらの写真は、民族学的な分類のために制作されたものではなく、純粹なひとりの人間として撮影された肖像写真なのである。

ポトーは、国立自然史博物館の業務の一部として写真を撮影したのではなく、純粹に彼のプライベートなこととして撮影を行ったと考えられる。これは、アルマン・ド・クワトリファージュ人類学教授の指示でポトーのプリントを博物館が時折購入していることから容易に推察できる。一八六二年の支出記録に例をとれば、竹内使節団の被写体たちそれぞれが持ち帰る写真と、人類学展示室で使用するための写真を購入している。

クワトリファージュはポトーの写真に強く魅かれており、『人類を学ぶことについての序論(Introduction a l'étude des faces humaines (1887))』など自身の著書に掲載している。正面と横顔というポトーの写真の典型が、この書籍に掲載された銅版画から見いだすことができる。科学的な出版物に掲載されることを通して、ポトー

の写真は学術資料として見られるようになり、民俗学的な写真撮影の方法として彼の撮り方がスタンダードとなった。さらに別の例をあげれば、一八七六年一〇月、護衛艦ラ・マジシエンヌ号による地球一周の間に行われる民族誌的な写真撮影のためのフォーマットとして、西吉十郎(池田使節

でのオランダ語通詞)(図12および図13)の正面と横顔の肖像写真がルドヴィク・サバティエ博士に渡されたという事実もある。
ジャック・フィリップ・ポトーは、一八七二〜七三年頃、写真の原板を国立自然史博物館に寄贈した。彼の著作である写真原板がその後博物館の写真コレクションの基礎になったというだけでなく、それが科学的な機関のコレクションにおいて、写真の重要性を示した点においても重要な出来事だったといえる。人類学者の間では以前からポトーの写真は認められていた。しかし、

竹内使節団を研究する歴史学者は文献に目を向けており、非文字文化である視覚媒体は十分に活用されているとはいえない。
近年、ポトーの歴史的な位置づけは少しずつが見直されてきている。
二〇一一年、ピット・リヴァース博物館では、The Last Samurai: Jacques-Philippe Potreau's Photographs of the Japanese Missions to Europe, 1862 and 1864と題した展示を開催し、これらの写真を展示した。今後さらにポトーの研究が深まることを切に願っている。

●ピット・リヴァース博物館ホームページアドレス
www.pitt-rivers-museum.ox.ac.uk



福沢諭吉 (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 文久2年 (1862)
鶏卵紙。竹内使節団定役通詞。



高松彦三郎 (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 文久2年 (1862)
鶏卵紙。竹内使節団小人目付。



堀江六五郎 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団小人目付。



箕作秋坪 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 文久2年 (1862)
鶏卵紙。竹内使節団翻訳方。



池田筑後守長発 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団正使。



田辺太一 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団外国奉行支配組頭。



塩田三郎 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団通弁御用出役。



斎藤次郎太郎 (Pitt Rivers Museum Collection)
撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団徒目付。



西 吉十郎の横顔 (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団通弁御用頭取。



西 吉十郎 (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者: ジャック=フィリップ・ポトー 撮影地: フランス・パリ 撮影年: 元治元年 (1864)
鶏卵紙。池田使節団通弁御用頭取。



すみ (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者：ジャック＝フィリップ・ポトー 撮影地：フランス・パリ 撮影年：元治元年（1864）
鶏卵紙。パリ万博の日本茶屋で働くため、パリを訪問した3人の若い女性のうちの1人。



斎藤健次郎 (Pitt Rivers Museum Collection)

撮影者：ジャック＝フィリップ・ポトー 撮影地：フランス・パリ 撮影年：元治元年（1864）
鶏卵紙。パリ在住・21歳。